

令和4年度 山形県立農林大学校 学校運営評価について

【運営方針1】教育カリキュラムの充実

【評価基準】 A:大きく上回る B:上回る C:概ね達成 D:やや下回る E:下回る

【基本方向】農業新技術等を組み入れたカリキュラムの強化						
評価項目	評価目標	具体的方策	取組状況	自己評価	次年度に向けた改善策	
1 先進技術等に対応したカリキュラムの充実	(1)スマート農林業に関する講義の実施:5回	① スマート農林業に関する学習の充実【拡充】 現在、現地で普及が進んでいるスマート農林業に関する技術を学ぶため、アシストスーツ着用での作業体験やドローンによる葉色診断に基づく可変追肥やドローン・収量センサー付きコンバイン・リモコン草刈機の操作実演、ICTを活用したセンシングによる環境制御技術や高度な経営管理技術などの活用に向けた体系的な授業を実施する。今年度は、ICT利用によるハウス環境の外部モニタリングが可能なICT育苗研修棟を整備する。 レーザー計測やドローンを活用した森林管理など、スマート林業の知識と技術の習得に向けた授業を実施する。特に、卒業論文研究でも取上げ、より実践的に活用し、課題の検証を行う。また、VRを用いた伐倒やかかり木の危険予測についての学習を取入れ、スマート林業に関する学生の技術習得を図っていく。	・スマート農林業に関する学習の充実を図るため、農業機械メーカー(㈱南東北クボタ、㈱ケーエス、㈱イノフィス)の協力を得て、ドローンによる模擬農薬散布(7月)、ドローン操作体験(9月)や施設園芸におけるスマート技術とアシストスーツ着用(8月)、収量センサー付きコンバイン(10月)の実演と講義を実施した。さらに、6月にスマート農林業技術を開発している企業(NTT)担当者から、最新の開発技術(スマートグラス等)に関して、8月に㈱ファームフロンティアよりドローンによる水稲の葉色診断に関して講義を受けた。 ・ドローン操縦のための免許取得に向けて「ドローン操作実習講座」を開講し、8名が免許を取得した。 ・ICT利用によるハウス環境の外部モニタリングが可能なICT育苗研修棟を整備した。 ・林業分野においては、レーザー計測の基礎知識に関する講義や実習など、スマート林業の知識と技術の習得に向けた授業を計4回実施した。特にレーザー計測(9月、12月)、ドローン計測(7月、10月)については、卒業論文研究で取組み、現場での活用のための課題を検証した。また、2月にVRを用いて、かかり木の危険予測等について学習した。 ・林業分野における森林情報のリモート計測の学習に利用するため、ドローン(1機)を購入した。  * スマート農林業に関する講義を合計11回行い、スマート農林業に関する学生の理解が深まったことから、「A」評価とする。	A	・スマート農林業に関する技術については、現在も技術開発が盛んに行われていることから、最新技術を学ぶため、農業機械メーカー等と連携して、今後も実習や免許取得のための講座を開講する。 ・林業分野においては、購入したドローンにより撮影した画像データを解析し、森林環境を計測する実習を行う。また、今年度に引き続き、VRを用いた伐倒やかかり木の危険予測についての学習を行い、スマート林業に関する学生の技術習得を図っていく。	
	(1)農大チーズの販売回数:10回	① 製品加工実習による農産加工技術の充実【拡充】 乳製品加工技術を習得するため、平成30年度に整備した乳製品加工施設を利用して加工技術に関する実習を行い、開発・製造したチーズ(ストリングタイプ等)を県庁購買部や農大市場等にて販売する。 これまで製造したチーズはフレッシュタイプのチーズであるため、日持ち性に課題があった。そこで、今年度、新たに熟成タイプのチーズである「チェダーチーズ」の製造に取り組む。	・乳製品加工技術を習得するため、整備した乳製品加工施設を利用して加工技術に関する実習を行い、開発・製造したチーズ(ストリングタイプ、モッツアレラチーズ)を農大市場(2回)の他、県庁購買部(2回)で販売した。 ・卒論研究で新たに「チェダーチーズ」およびチーズを使った関連商品の製造に取組み、農大市場等で7回販売した。  * 農大チーズおよびその関連商品を合計11回販売し、目標の10回を達成したことから「C」評価とする。	C	・乳製品加工技術を習得するため、今後も加工技術に関する実習を行い、定期的に製造したチーズ(ストリングタイプ等)を農大市場等で販売する。	
2 実践教育を重視したカリキュラムの充実	(1)先進農林業者等体験学習の受入農林業者等の評価:良好との評価80%	① 先進農林業者体験学習等の実施【拡充】 農業者の下での実地体験を通じて、実践的な技術や優れた経営感覚を学ぶため、1年次に前期10日間、後期10日間の先進農林業者等体験学習を実施する。コロナ禍等のため、原則「通い」とし、農業法人等への就職のためのマッチングの機会ともなるよう、依頼先については、学生の希望を聴取しながら、担任と十分に協議し、決定する。	・1学年の先進農林業者等体験学習を6月から7月と9月から10月に予定通り、10日間ずつ実施した。体験学習先への就職を希望する学生もおり、マッチングの良い機会もなった。受入れ農家については、今年度より「山形県地域営農農協連合会」にも連携して、受入れ農家の拡大を図った。なお、これまで原則、先進農林業者宅へ宿泊して実施していたが、今年度は、コロナ禍等への対応として、原則として日帰りで実施した。  * 受入農林業者等からの良好との評価は88%であり、目標の80%を達成したことから、「C」評価とする。	C	・1学年前期と後期の年間2回、各10日間の先進農林業者等体験学習が、就職のためのマッチングの機会ともなるよう、学生の意向も聴取しながら、受入れ農家を決定する。コロナ禍前には、原則、先進農林業者宅へ宿泊して実施していたが、来年度以降は、受入れ農家の負担軽減のため、原則として日帰りで実施する。  ・今後も就職及び就職希望の学生が、現場で実践的な技術や知識を学ぶため、農業法人や食品関連企業、森林組合等の理解と協力を得て、インターンシップを実施する。 ・農業法人からの求人募集が遅い傾向のあることから、年度当初から農業法人に対して求人募集を働きかけるとともに、学生に対してはインターンシップに積極的に参加し、就職イメージを早期に醸成するよう、指導していく。	
		② インターンシップの導入【継続】 法人就職及び就職希望の学生が、現場で実践的な技術や知識を学ぶため、農業法人や食品関連企業、森林組合等の理解と協力を得て、インターンシップを実施する。 農業法人からの求人募集が遅い傾向のあることから、年度当初から農業法人に対して求人募集を働きかけるとともに、学生に対してはインターンシップに積極的に参加し、就職イメージを早期に醸成するよう、指導する。	・就職及び就職希望の学生が、現場で実践的な技術や知識を学ぶため、農業法人や食品関連企業、森林組合等の理解と協力を得て、インターンシップを実施した。本取組みにより、就職志望先に関して、学生自身が就職イメージを醸成することができ、インターンシップ先への就職につながった。インターンシップ先の農業法人等からも「事前に学生のことを知ることができて良かった。」との意見を得た。			
3 先端技術に関する現地調査カリキュラムの充実	(1)現地調査の実施数:100回	① 最先端の研究や生産現場等での現地調査の実施【継続】 先端技術について学習するため、各学科ごとに研究機関や農業法人、企業、森林組合等での現地調査を実施する。なお、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、県内への現地調査を中心とし実施するが、コロナ禍の状況が改善していれば、県外への現地調査の実施を検討する。	・各農業系学科では、県内の先進的な農業者・農業法人や試験研究機関、青果・生花市場、小売店、食品製造会社等への研修を通して、経営の考え方や最新技術、市場動向等を学んだ。 ・林業経営学科では、森林組合や木材関連企業等の協力を得て、実践的な技術習得に取り組んだ。また、GPS機器を使用した実習やGISによる森林情報管理技術など、IT関連の最新技術について学んだ。 ・コロナ禍の状況が改善していたことから、県外における現地調査も実施することができた。  * 現地調査の実施回数は全7学科で合わせて139回となり、目標の100回を上回ったことから、「B」評価とする。	B	・来年度も農林業の優良事例や最新の農林業の技術等を視察し、現場段階での最新技術の取組み等の知識習得を推進する。 ・林業経営学科では、林業・木材関連企業等の協力を得て、最新技術等に関する知識の習得を引き続き支援する。	
4 新しい生活様式に対応した授業の実施	(1)遠隔授業システムの利点を活かした授業等の実施回数:3回	① 新しい生活様式に対応した遠隔授業等の実施【拡充】 新型コロナウイルスの感染拡大により、外部(県外・海外)への研修機会が制限もしくは失われる中、それら機会を補うため、遠隔授業システムにより、県外や海外とリアルタイムでつなぎ、学生が最新の最先端の情報に触れる機会を設定する。また、同システムは、来校して講義をすることが困難な一流講師等から受講可能であることから、その利点を活かした講義を実施する。今年度は、利用場面の拡大を図るため、利用事例を整理し各担任へ情報提供し、授業実施を推進する。それにより、国内外の遠隔地を結んだ授業や県内の講演会等の聴講の実施を目標とする。	・整備した遠隔授業システムにより、県外や海外とリアルタイムでつなぎ、最新・最先端の情報に触れる機会を設定した。具体的には、アメリカアイダホ州とつないだ同州における森林管理状況の学習を行った。また、東日本農業大学校等プロジェクト発表会・意見発表会、森林林業技術交流発表会や山形大学農学部生(農林大OB)との交流会等、県外や校外に行くことなく、聴講、交流することができた。  * 遠隔授業システムの利点を活かした授業等を合計4回開催し、目標の3回を上回ったことから、「B」評価とする。	B	・遠隔授業システムの有用性が認識され、コロナ禍後も定着・利用される可能性が高いことから、その利点を活かした国内遠隔地や海外等との授業や情報交換会等を実施していく。	
<b>自己評価</b>				<b>自己評価</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>農業機械メーカー等と連携して、スマート農林業に関する学習を目標を大きく超えて実施するとともに、乳製品加工施設を利用して、新たな製品開発に努め、チーズ等の製造・販売を実施する等、概ね目標を達成することができた。</li> <li>先進農林業者等体験学習については、トラブルなく実施することができた。インターンシップの実施により、スムーズに就職先を確定することができた。</li> <li>県外等への現地調査を新型コロナウイルス感染に注意しながら実施し、目標を超えた回数を実施することができた。遠隔授業システムを有効に利用し、海外や県外等との発表会聴講、情報交換を行った。</li> </ul>				<b>B</b>		
<b>学校関係者評価(意見・要望等)→現在の取組状況・次年度の改善策</b>				<b>学校関係者評価(意見)</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>スマート農林業の学習は一般農業者も興味があるため、一般農業者も参加できるよう実施して欲しい。 →今年度も一般農業者が参加できる公開授業として実施している。来年度も継続して、公開授業とする予定である。</li> <li>現場では、新たな事業としてスマート林業実践事業に着手しており、農林大学校と連携して実施できればと考えている。 →スマート林業については、現場と連携して臨場感のある学習を行っている。来年度も卒論研究等で、現場と連携していきたい。</li> <li>スマート農林業に関する学習で、果樹のドローンによる農薬散布を検討して欲しい。 →ドローン利用については、果樹の農薬散布を含め、利用拡大が盛んに進んでいる。本校では、現在、免許取得の支援を行っており、まずは、農機具メーカーからの情報収集を行いたい。</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>VRを用いた安全指導は良い取組みである。今後とも力を入れて実施して欲しい。</li> <li>先進農林業者の下での実地体験、インターンシップの強化、現地調査計139回はいずれも高評価である。</li> <li>コロナ禍ということもあり、学校運営は非常に難しかったと思う。評価も達成され、関係者の努力が感じられた。</li> </ul>		<b>B</b>